

症例報告

多発性陰囊粉瘤症の1例

南本 俊之* 草島英梨香** 石川 耕資**

A case of multiple scrotal atheromatosis

Toshiyuki MINAMIMOTO, Erika KUSAJIMA
Kosuke ISHIKAWA**Key words** : idiopathic calcinosis of the scrotum —
multiple scrotal atheromatosis — scrotum calcinosis

要 旨

20歳代男性，10年ほど前に両側陰囊に皮下腫瘍が生じた。その数が増えてきたため，当科受診となり，局所麻酔で切除・縫合を行った。病理組織検査で，濃縮した液状物質や石灰化物質が貯留した pseudo cyst がみられ，異物巨細胞や扁平上皮の集塊もあり，粉瘤が変性したものであることが示唆された。粉瘤は角化物を内包した皮膚腫瘍で，皮膚科や形成外科ではよく遭遇する疾患で，全身の皮膚に発生する。しかし陰囊で多発するものはまれであり，多発性陰囊粉瘤症と称する。特発性陰囊石灰沈着症になる過程であり，本症例もこれに該当すると考えられた。

はじめに

粉瘤は皮膚科や形成外科でよくみられる良性腫瘍であり，全身の皮膚に発生する。しかし，陰囊で多発するものはまれである。今回当科で経験した症例を文献の考察を加えて報告する。

症 例

症例：20歳代，男性

主訴：両側陰囊の皮下腫瘍の精査および治療

現病歴：当科初診の10年ほど前に陰囊に皮下腫瘍が生じ，数が増えてきた。前医の紹介で当科受診となった。

既往歴・家族歴：特記事項なし

初診時現症：両側陰囊に小豆大から大豆大の皮下腫瘍を多数認めた（図1）。自発痛や圧痛はなかった。

治療および経過

腫瘍は左右それぞれで，ある程度まとまって存在していたので，2回に分けて局所麻酔を用いて切除すること

とした。1回目は，左側陰囊のおよそ15個の病変部を，局所麻酔下に切除し一期的に縫合した（図2 a, b）。検体は長さ45mm，幅10mmほどであった（図2 c）。感染や創離開を起こさず経過し，1週間後に抜糸した（図2 d）。

初回手術の3週間後に右側陰囊の病変部の切除をした。右側はまとまっているおよそ8個の病変部分と，そ



図1 初診時，両側陰囊に小豆大から大豆大の皮下腫瘍を多数認めた。

*市立函館病院 形成外科

**北海道大学大学院医学研究院形成外科学教室

〒041-8680 函館市港町1-10-1 南本 俊之

受付日：2022年5月9日 受理日：2022年6月21日

れと少し離れた2か所の病変部の合計3か所を切除し縫合した(図3 a, b, c). 3つの検体の一番大きいものは30×30mmであり, この場所は術後8日目に離開した(図3 d). 術後14日目に再縫合を行った. 再縫合の後, 再離開することなく経過し, その後, 半年経過観察し,

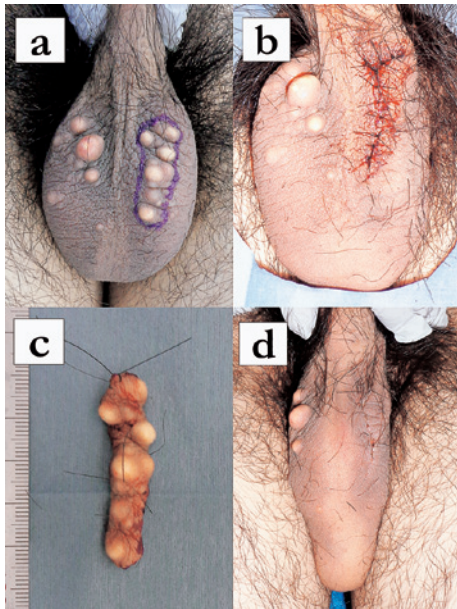


図2 左側陰囊の治療経過を示す. ある程度まとまったところを一塊として切除し(a), 一次的に縫合した(b). 検体は長さ45mm, 幅10mmほどであった(c). 感染や創離開を起こさず経過し, 1週間後に抜糸した(d).



図3 右側陰囊の治療経過を示す. まとまっているおよそ8個の病変部分と, それと少し離れた2か所の病変部の合計3か所を切除し(a), 一次的に縫合した(b). 一番大きな検体は30×30mmであり(c), この場所は術後8日目に離開した(d).

診察終了とした(図4).

病理組織検査

右側陰囊では, 濃縮した液状物質や石灰化物質が貯留した pseudo cyst が多発している所見であり, 粉瘤の所見は見られず, もともと液体が貯留した嚢胞が示唆された(図5 a, b). 左側陰囊も同様であった(図5 c, d)が, 異物巨細胞や扁平上皮の集塊が見られるところもあり, もともとは粉瘤であったことが示唆された(図6).

考 察

粉瘤は角化物を内包した皮膚腫瘍であり, 皮膚科や形成外科ではよく遭遇する良性疾患である. 通常単発性で, 全身の皮膚のいずれにも発生する. 陰囊に発生する場合もあるが, 多発例はまれである. 陰囊に多発するような疾患は Shapiro らがそれまでの報告症例と自分

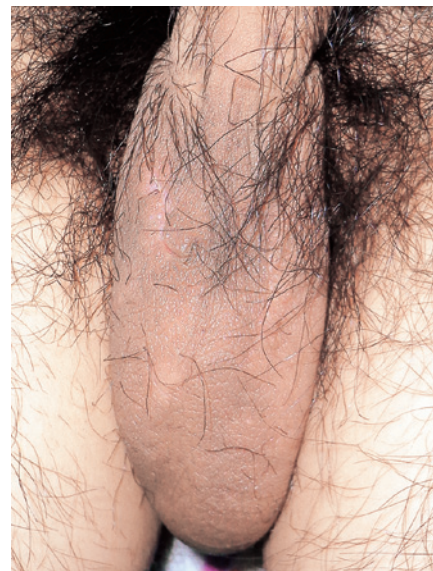


図4 当科終診時の陰囊を示す. 傷跡は目立たない.

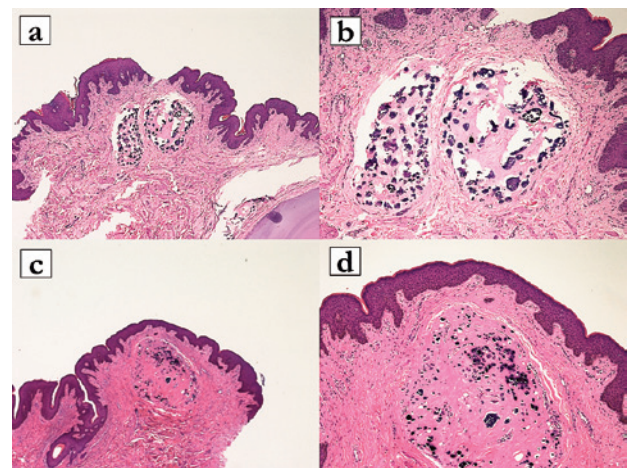


図5 a: H.E. 染色40倍 b: H.E. 染色100倍
c: H.E. 染色40倍 d: H.E. 染色100倍

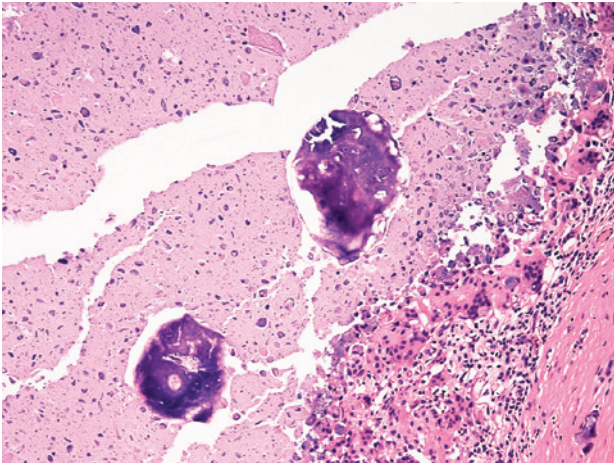


図6 石灰化像に併せて異物巨細胞や扁平上皮の集塊が見られるところがあった。H.E.染色200倍

たちの経験例を併せて1970年に特発性陰囊石灰沈着症 (idiopathic calcinosis of the scrotum) と報告し¹⁾、その後、その発生や経過から、特発性陰囊石灰化症、多発性陰囊粉瘤症 (multiple scrotal atheromatosis)、陰囊石灰沈着症 (scrotum calcinosis) として報告されている²⁻³⁴⁾。特発性陰囊石灰沈着症の多くが多発性陰囊粉瘤症の最終段階の病変であると考えられているが、確定的な結論は得られていない。本症例でも粉瘤が変性したものであったことが示唆される場所もあり、多発性陰囊粉瘤症から特発性陰囊石灰沈着症に移行している病態であることが考えられている。

本邦で報告され、著者らが集めることのできた症例は、32文献の40症例であった²⁻³³⁾。これらのほとんどが1例報告であり、複数報告はまれであった。発症年齢は10歳から64歳であり、平均32.0歳、発症から医療機関を受診するまでの平均罹病期間は13.4年であった。年代ごとの症例数と平均罹病期間をみると、10代8例、12.3年、20代9例、15.6年、30代10例、19.0年、40代9例、9.7年、50代1例、5.0年、60代3例、5.0年であった。10代から30代までの若いころに発症し、他人に相談することを躊躇するような場所であるので医療機関を受診することがためらわれたものと思われた。そのため、いたずらに年月を過ごしていることが示唆され、当人の苦悩は計り知れないものとも思われた。当科で経験した症例は初診時20歳代であり、10年ほど前からあったということで、やはりかなり悩んだのではないかと推測された。女性スタッフには見られたくないと思ひ、診療や手術に際しては男性スタッフのみ関与することとした。このことが望ましいことであったのかは疑問の余地があるが、慎重に対応することが重要であると思われた。手術の傷跡は拘縮をきたすことはなく、このことは、陰囊皮膚の伸縮性によるものだと思われた³⁵⁾。

ま と め

多発性陰囊粉瘤症の1例を経験した。本疾患は特発性陰囊石灰沈着症に移行する病態であると考えられているがまだ明らかではない。思春期に発症し罹病期間が長くなることもあり、慎重に対応すべきものであると思われた。

利益相反開示

本症例の発表に当たり開示すべき利益相反になるような企業等はない。

文 献

- 1) Shapiro L, Platt N, Torres-Rodriguez VM. Idiopathic Calcinosis of the Scrotum. Arch Derm. 1970; 199-204.
- 2) 大草康弘, 長島正治. 特発性陰囊石灰沈着症 — 自験例の報告とその発症機序について —. 臨皮. 1983; 37: 137-140.
- 3) Yokoyama M, Watanabe K, Ochi K, et al. Idiopathic Scrotal Calcinosis: A Case Report. Nishinohon J. Urol. 1984; 46: 1357-1959.
- 4) 後藤健太郎, 姉崎衛, 大沢哲雄ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の2例. 臨泌. 1985; 39: 165-167.
- 5) 井上俊一郎, 青木重信, 鈴木正之ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の2例. 臨皮. 1985; 39: 161-164.
- 6) 中村義朗, 青木敏行. 特発性陰囊石灰沈着症. 皮膚. 1985; 27: 725-727.
- 7) 熊谷乾二, 雨宮裕, 村松弘志ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 泌紀. 1987; 33: 1289-1291.
- 8) 朴勺, 金哲将, 小西平ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 日泌会誌. 1988; 79: 339-343.
- 9) 海老原全, 桜岡浩一, 清水宏ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 臨皮. 1988; 42: 437-441.
- 10) 川口正一, 平野章治, 美川郁夫ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の2例. 西日泌. 1989; 51: 1691-1694.
- 11) 朴勺, 金哲将, 九嶋麻優美ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 臨泌. 1991; 45: 1051-1053.
- 12) 入澤千晴, 橋本樹, 松岡久光ほか. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 泌紀. 1991; 37: 1731-1733.
- 13) 安齋眞一, 伊藤義彦. Eccrine duct milla に続発した陰囊石灰沈着症の1例. 臨皮. 1994; 48: 183-186.
- 14) 西尾賢昭, 山岸雄二, 石崎宏. 特発性陰囊石灰沈着症. 皮膚. 1994; 36: 504-508.
- 15) 赤木竜也, 出来尾哲, 地土井襄麿. 多発性陰囊粉瘤症の2例. 西日皮. 1996; 58: 219-222.
- 16) 矢野健二, 細川互. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 医療. 1996; 50: 398-401.

- 17) 小川晃史, 赤坂俊英, 昆宰市ほか. 陰囊石灰沈着症の1例. 臨皮. 1997; 51: 549-551.
- 18) 小川晃史, 赤坂俊英. 結節・腫瘍(2) -代謝異常- <臨床例> ⑥ 陰囊石灰沈着症. 皮膚診療. 1998; 20: 795-798.
- 19) 金子高英, 水木大介, 白石正彦ほか. 多発性陰囊粉瘤の1例 - 嚢腫内に石灰化がみられた例 -. 皮膚臨床. 1999; 41: 542-543.
- 20) 菊池敏郎, 伊東英里, 小林衣子. 陰囊石灰沈着症の1例. 臨皮. 1999; 53: 348-350.
- 21) 前川嘉洋. 皮膚疾患におけるマトリックスの関与に関する研究. 医療. 1999; 53: 533-536.
- 22) 岩本真一郎, 小佐野容子, 山田裕道ほか. エクリン汗管由来の上皮性嚢腫に続発した多発性陰囊石灰沈着症の1例. 臨皮. 2000; 54: 263-265.
- 23) 増田広, 高橋克之, 一ノ瀬義雄ほか. 特発性陰囊石灰化症の1例. 泌外. 2000; 13: 795-797.
- 24) 吉田貴子, 白井明, 伊津野緑ほか. 特発性陰囊石灰沈着症. 皮膚臨床. 2000; 42: 1257-1258.
- 25) 柳下晃一, 杉原和子, 山田秀和. 陰囊石灰沈着症の1例. 皮の科. 2003; 2: 310-312.
- 26) 廣崎邦紀, 嵯峨賢次, 兼古理恵ほか. 陰囊石灰沈着症 - 3例報告と発生機序に関する文献的考察 -. 皮膚臨床. 2003; 45: 1587-1591.
- 27) 長坂武, 稲田幸子, 木花光. 多発性陰囊粉瘤の1例. 皮膚臨床. 2004; 46: 352-353.
- 28) 吉田周平, 今里賢一郎, 安楽邦明. 陰囊多発粉瘤腫の1例. 形成外科. 2004; 47: 1143-1146.
- 29) 原芳紀, 服部裕介, 松浦謙一ほか. 外尿道口狭窄を合併した多発性陰囊粉瘤症の1例. 泌外. 2005; 18: 629-631.
- 30) 岸本和裕. 石灰沈着を伴った多発性陰囊粉瘤症 多彩な組織所見を呈した1例. 臨皮. 2006; 60: 457-459.
- 31) 阿部浩之, 高井彩也華, 崎山真幸ほか. 検体重量290gであった特発性陰囊石灰沈着症の1例. 皮膚臨床. 2009; 51: 438-439.
- 32) Miyagawa T, Kadono T. Scrotal calcinosis. JJCO. 2017; 47: 185-186.
- 33) 山下彩, 濱井公平, 松井美萌. 特発性陰囊石灰沈着症の1例. 皮膚臨床. 2017; 59: 326-327.
- 34) 西山茂夫: 皮膚病アトラス. 3版. 東京: 文光堂; 1992: 218.
- 35) 鬼塚卓弥: 形成外科手術書. 実際編. 改定3版. 東京: 南江堂; 1996: 918.